不正な管理人のたとえ

ルカ福音書16:1-13

16:1 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。
16:2 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』
16:3 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、物ごいをするのは恥ずかしいし。
16:4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』
16:5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言うと、
16:6 その人は、『油百バテ』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい』と言った。
16:7 それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、『小麦百コル』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい』と言った。
16:8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。
16:9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。
16:10 小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。
16:11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。
16:12 また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。
16:13 しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

【NIV】Luke 16:9 I tell you, use worldly wealth to gain friends for yourselves, so that when it is gone, you will be welcomed into eternal dwellings.

【祈りながら考えよう】

（１）悔い改めて救われた者たちはこの世でどのように生きていくべきですか。
（２）主人は、不正な管理人の（何を）ほめられたのですか。
（３）12節の「他人のもの」と「あなたがたのもの」の違いを説明して下さい。

【解　説】

（１）不正な管理人

ルカ福音書15章で、迷える羊、失われた銀貨、続いて放蕩息子のたとえを学んだ。神様はどんな中からも、1つの魂を求めて、これを捜しだし、ご自分の手にしっかり握りしめて下さるお方であることを、学んだ。

では、迷える羊が見出された、あるいは放蕩息子が家に帰って来た、それからどうなるかということである。父親は手放しで喜んで、最上の物をもって息子を歓待した。その後は、毎日どんちゃん騒ぎを続けていったのか、どういうふうに生きていったのか。

神を信じて救われた者はどういうふうにこの世を生きていく者なのか。主イエスはこれまでパリサイ人や律法学者たちに向かって話しておられたが、ここでは《弟子たちに》教訓を与えておられる。

> イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。
> 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』

この箇所は、ルカ福音書の中で最も難解な箇所である。なぜ難解かと言うと、不正行為を推賞しているように見えるからである。しかし、実際はそうではない。そのことを順を追って見ていく。

この話の中の《金持ち》は神ご自身を表している。《管理人》とは、他人の財産を託された人のこと。主の弟子はみな管理人である。《管理人》は、主人の資金を使い込んだといって告訴された。解雇されることを通知された。

（２）解雇後のための計画

> 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、物ごいをするのは恥ずかしいし。ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』
> そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言うと、その人は、『油百バテ』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい』と言った。（3-6節）

《管理人》は解雇後に備えて準備しなければならないと考えた。きつい肉体労働をするには体力がないし、《物ごいをする》のは自尊心が許さない。解雇されたあとのことについて、ある計画を考えた。具体的には、主人に対して負債のあった債務者を呼んで、主人に対する負債を削ってやる。そうすれば、後で自分が首になった時、この人たちに与えておいた恩義で、自分の職を得ることができると考えた。

そこで、自分の主人の債務者たちを呼んで、「《いくら》借りがあるのか」と尋ねた。最初の債務者が《油100バテ㈢㊿㊀ﾘｯﾄﾙ》と言うと、管理人は、《50バテ》支払えば貸し借りを帳消しにしてやると言った。

> それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、『小麦百コル』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい』と言った。（7節）

《別》の債務者は《小麦100コル㈢㊀ﾄﾝ》の借りがあった。この管理人は、《80コル》支払えば借用書に「支払済」としるしをつけてやる、と言った。

（３）何をほめられたのか

> この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。（8節）

この話の衝撃的なところは、《抜け目なくやった》ことで《主人》が《不正（ぜんせい）の管理人》を《ほめた》ことである。

あとの節から明らかなように、この管理人は、不正行為ではなく、その先見の明をほめられたのである。

この話を私たちの生活に適用するには、次の点をはっきりさせておかなければならない。すなわち、神の子どもの将来は、地上にではなく、天にあるということ。管理人が職を失った時のために友人を確保しておいたように、キリスト者も天の御国に至った時に喜んで迎えてもらえるよう、主人の物や財産を賢く用いるべきだということである。

主は、《「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜け目がない」》と言われた。これはこの世の人々は知恵を用いてこの世での将来に備えるのに対し、真の信者たちは「天に宝を積む際に」それほど知恵を用いていない、という意味である。

（４）この世の富で永遠に続く友を作る

> そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。（9節）

私たちは《不正（ギリシャ語 μαμωνᾶ マモン／この世の富）》を用いて、《自分のために友を》作るべきである。つまり、お金や物質的な物を用いて、魂をキリストに導き、永遠に続く友情を築くべきなのである。

これが主イエスの教えである。物質的な所有物を賢明に投資することによって、私たちは人々の永遠の祝福にかかわることができる。天の門に着いた時、私たちは、自分が犠牲を払ってささげたり祈ったりしたことによって救われた人々の歓迎を受けることになる。

（５）小さい事に忠実な人は大きいことにも忠実である

> 小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。

私たちが《小さい事》（金銭）を管理する者として《忠実》であるなら、《大きい事》（霊的な富）の扱いにおいても《忠実》であるということになる。金銭が比較的重要でないことが、《小さい事》というふうに表現されている。

（６）他人のものとあなたがたのもの

> ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。（11節）
> また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。（12節）

主のために《不正の富（この世の富）》を用いることに誠実でない者が、《まことの富》を任されるようなことはない。12節では、《他人のもの》と《あなたがたのもの》が区別されている。私たちが持っている金銭も時間も能力もすべて主のものであり、私たちはこれらを主のために用いるべきである。

《あなたがたのもの》とは、キリストのために忠実に仕えた結果、今の世と来たるべき世において私たちが受けることになる（報い）のことを言っている。

（７）神にも仕え、富にも仕えることはできない

> しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

神に救っていただいた者は、神のみに仕えなければならない。これは決して戒律ではない。神第1の生き方こそ、真に自由な生き方であり、生き生きとした生き方をおくることができる。